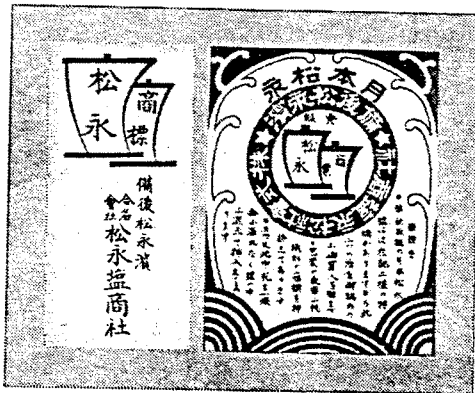


松永湾の史跡巡り

旧山陽道を中心に

▶月本松永塩商標



本庄重政自刻像



松永塩商社の建物

講師 田口義之・坂本敏夫

備陽史探訪の会

〒720 福山市多治米町5丁目19番8号

電話0849 [53] 6157

平成8年【1996】3月10日実施

【予定表】

午前9時 松永駅北口・出発

松本古墳

神村八幡社

矢捨古墳

正午 薬師寺【昼食】

今津本陣河本家

蓮華寺

高諸神社

塩商社跡

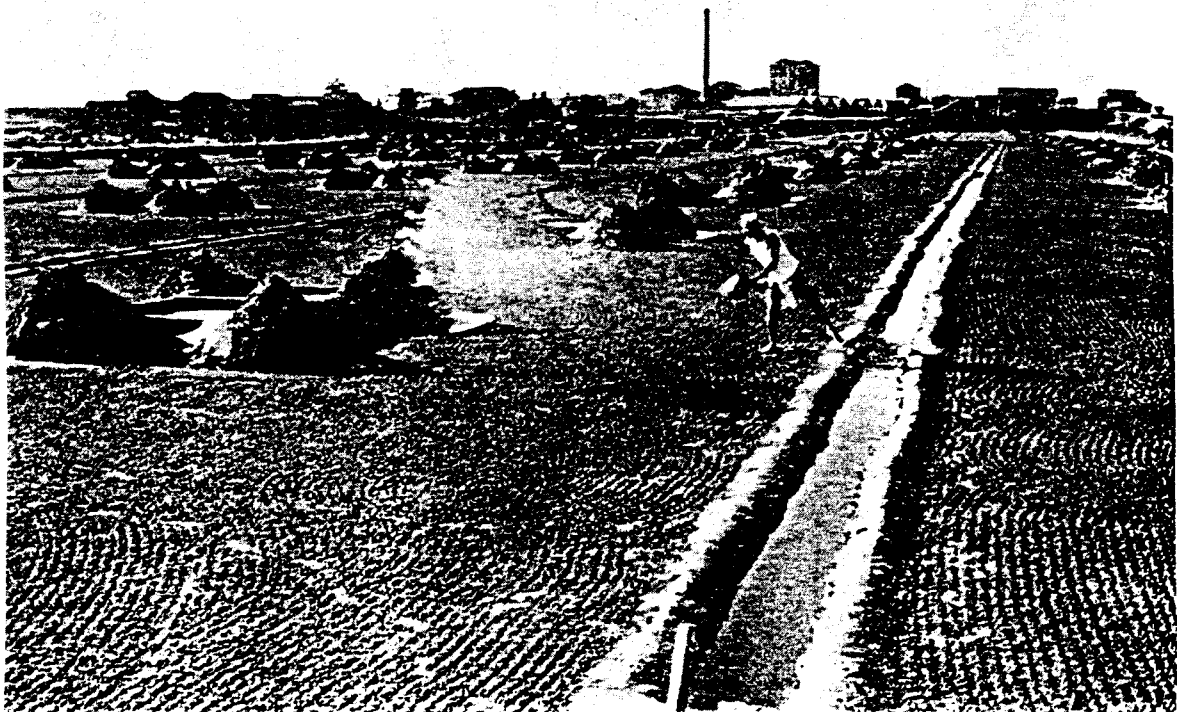
午後3時半松永駅南口・解散

【注意】団体行動ですので指示に従ってください。

体調の悪い方は受け付けまで申し出てください。

ゴミは自分で持って帰って下さい。

途中で帰られる方は必ず係りまで申し出てください。



（松永水界隈）

田口 義之

“下駄の町”松永は、戦後の一時期「松永市」として独立の市を形成してただけに、福山市の中でも一種独特の雰囲気醸し出している。JR松永駅に降り立って駅前を東に歩いてみよう。今でも小さな木工場が海に通じた水路の両側に並び、潮と木の香りの混じった昔懐かしい匂いが漂ってくる。

松永が今日、はきものの町・下駄の町としてあるのは、江戸時代前期、この町が本庄重政によって“塩田”として開発されたことに端を発している。

明治の初めのこと、この町で丸山茂助という一人の創意に溢れた人物が、下駄の製造を始めた。彼は最初、周辺の山で採れる桐材で下駄を作っていたが、材料費も高く、余りはかばかしいものではなかった。そこで目を付けたのが、松永に入港する“塩船”がバラストとして積んでいた“油木（あぶらぎ）”であった。“油木”は山陰産の雑木で値段も安く、しかも下駄にすると丈夫ではき

心地も上々であった。その後人々の創意工夫によって松永の下駄は次第に販路を広げ、現在の名声を獲得して行った。『塩が下駄を生んだ』と言われるゆえんである。

松永の散策は、駅南口左手の「日本はきもの博物館」からスタートしよう。同博物館には世界各地のはきものをはじめ、特産の松永下駄の製造過程などが分かりやすく展示され、日ごろお世話になっている“はきもの”を改めて見直すいい機会になる。また、最近隣接して「日本郷土玩具博物館」がオープンし、郷愁をかきたててくれる。

ここからすぐ東側の水路沿いに南に下ると、松永の産土神、「潮崎神社」が鎮座している。前に述べたように松永は塩田として開発された近世の干拓地で、この神社は塩田を守る堤防の守護神として勧請されたものである。そして、左手の山腹に見えるお寺が“松永開祖”本庄重政が創建した禅宗の承天寺である。見上げると唐様の立派な山門が建ち、右手の墓地には重政をはじめ本庄一族が眠っている。

本庄重政が松永塩田の干拓に取り掛かったのは

万治三年（一六五九）の春と伝わっている。重政は数奇な人生を歩んだ人物である。水野家臣の家に生まれた彼は、青年時代、千石取りを夢見て家を飛び出した。しかし、時代は既に乱世ではなく、太平の世であった。夢破れた重政は、福山藩に帰参し、新田開発に意を注ぐようになる。その彼が晩年情熱を傾けたのが松永塩田の開発であった。

重政は、放浪時代、播州赤穂の大石頼母（有名な内蔵助の父）と親交があり、赤穂塩田の隆盛を目の当たりにしていた。松永湾は遠浅で干満の差が大きく塩田に向いている。こうして始められたのが松永塩田の開発であった。完成は八年後の寛文七年（一六六七）のこと、干拓された土地は彼によって「松永」と命名された。松永の人々にとって重政は正に「松永開祖」の恩人なのである。

再びもときた道を引き返し、JR山陽本線の踏切を越えると、干拓地松永ではなく、近世以前の土地で、古代以来の史跡が点在している。まず訪ねたいのは駅の東北に歩いて一五分程の所にある「松本古墳」である。全長五〇メートル前後の帆立貝式前方後円墳で福山地方では屈指の規模を持つ

ている。

ここから本郷川沿いに北に進むと、中世の新庄の故地本郷町である。川の西に聳える大場山城跡は鎌倉時代以来、幾多の興亡を繰り返したところで、最後の城主古志清左衛門の落城悲話は、今も土地の人々の胸に生きています。雑木を掻き分けて山頂に登ると、崩れ残った石垣や曲輪の跡が往時を偲ばせてくれる。

松本古墳から東に本郷川を渡ると、かつて山陽道の宿場町として栄えた今津町である。京・大阪から下る旅人は、備中高屋宿から備後神辺宿、そしてこの今津宿で足を休め、芸州領尾道へと旅立って行った。現在でも、町並みのそこかしこに、古い宿場町の面影を残している。（月刊びんご「備後散策」より）

松永町

JR松永駅の南口に降り立つと、その変貌には驚かされます。かつて塩田が広がっていた駅前には、広い道路が真っすぐ南に伸び、両側にはモダンな住宅や商店が軒を並べています。

今から三百余年前、本庄重政が“袋の海”と呼ばれていた松永湾を埋め立てて、塩田を造成しようとした時、ここには遠浅の海原が広がっていました。陸は、現在の神村から南に“松崎”と呼ばれる岬が、南に突き出ていたのみでした。

松永の埋め立ては、万治三年（一六六〇）の春に始まったと伝わっています。当時重政は、福山藩に帰参して七年目で五五才、既に多くの干拓事業を手掛け、藩の興廢を一身に担った感がありました。しかし、松永塩田の造成は、その彼にとっても容易な工事ではありませんでした。沖に築造した堤防は嵐のたびに流され、完成は七年後の寛文七年（一六六七）と伝わっています。

松永の町名はこの時に生まれました。この地は

初めにお話ししたように、神村の松崎の地先に造成されました。重政は、その「松」にちなんで、中国の吉祥句「松寿永年」から、新たに造成された土地の繁栄を祈って「松永」と命名したのです。それだけに重政のこの塩田に対する愛着は深く、自らの居宅（現在の本庄神社の地）を塩田の東の丘の上に移し、その南には菩提寺として承天寺を建立しています。そのため彼によって造成された松永村は、いつしか“本庄村”と呼ばれるようになった言われています。

しかし、これが彼の子孫に災いしました。彼のこの行為は、福山藩の中に本庄氏の別天地を作ることでした。重政が生きているうちは彼の声望を憚って黙認していた藩も、彼が延宝四年（一六七六）に没するとさっそく本庄氏の追放を画策します。すなわち、喧嘩という些細な罪を取り上げて重尚を領内から追い出し、本庄氏の勢力を松永から一掃してしまおうのです。（田口義之・リビング福山「町名を訪ねて」より）

神村町

「神村」と書いて「かむら」と読みます。『沼隈郡誌』等によりますと、町名の起源は『倭姫世紀』に見える吉備名方の浜宮に由来すると伝えます。

すなわち、現在伊勢神宮にお祭りされている天照大神は、初め宮中に奉斎されていましたが、崇神天皇の時代に宮外にお移しすることになりました。そして、伊勢に鎮座される前四年間程滞在された「吉備名方の浜宮」の故地こそ同地の鏡山で、神村の地名はこの故事に由来すると言うのです。

神話や伝説は別として、神村の地は古くから開けた地域です。町内の南東部にあたる字松本には全長五〇メートルに達する帆立貝式前方後円墳「松本古墳」が存在し、中央部の羽原川流域には点々と横穴式石室が分布し、古代豪族の活躍を物語っています。また、この地で注目されるのは、町内北部に「須江」の地名が残り、「須恵器」と呼ばれる古代の土器窯の跡が存在することです。須恵器は西暦五世紀頃、朝鮮半島から渡来した新しい土器で、その職人集団が「須恵部」と呼ばれた人

々です。須恵部の活躍の跡は全国各地及びますが、ここ神村の須江も彼らの居住に因む地名であることは間違いありません。

時代が下ると、この付近にも庄園が設定されたようです。京都の石清水八幡宮の記録によりますと、同宮の庄園は備後に三カ所あって、その一つに「神村庄」の名があります。同庄は、現在『広島県史』等では御調町の「神」に比定されていますが、ここ福山市の神村一帯である可能性も残っています。まず、近世の記録に沼隈郡神村庄の名があること。また、御調の神は「かみ」村であって、「かむら」ではないことです。中世の神村庄は、庄号自身が神村ですから、こちらのほうに分があるわけです。石清水の分霊である八幡宮も御調町の「神」にはなく、神村にはあります。神村庄は、果たして何処にあったのか、興味の尽きないところです。(田口義之・リビング福山「町名を訪ねて」より)

宮前町

昭和四四年、神村町の一部を割いて、新たに設けられた町です。その名は、読んで字のごとく、神村の鎮守「神村八幡社」に由来します。

J R松永駅北口に降り立ちますと、一筋の商店街が北に続いています。今でこそ、松永の表玄関は駅の南口に移ってしまいましたが、かつてはこの通りが松永のメインストリートでした。私などは子供のころ、松永に来ればこの通りで親に玩具をねだったものです。

それはさておき、この通りから北を眺めると、小さな丘が正面にそびえています。近づいてみますと、麓に鳥居が建ち、急な坂道を登りつめると、赤い社殿が建っています。これが町名の起りとなった神村の八幡さんです。

村の鎮守として親しまれている“八幡さん”ですが、その起源は謎に包まれています。公式には応神天皇と神功皇后を祭るということになっていますが、元々は九州の宇佐地方で祀られていた神様で、大陸からの渡来神だと言う人もいます。

この八幡信仰が全国に広まったきっかけは、東

大寺の大仏造立にあります。この古代最大の事業に、宇佐の八幡神は神託を下して協力し、中央進出を果たします。これが東大寺の鎮守として祀られている手向山八幡宮です。その後朝廷の八幡神によせる尊崇は厚く、都が平安京に移されると、王城鎮護の神として男山に祀られます。これが石清水八幡宮です。そして、時代が下り武士の世の中になると、源氏の祖源義家とその神前で元服したことから源家の氏神として崇められ、ここに有名な鶴岡八幡宮の創建となります。さらに、鎌倉に幕府が開かれ全国に守護地頭が派遣されると、彼らと共に八幡神も各地に祀られていきました。

神村の八幡さんは延久元年（一〇六九）の創建と伝わっていますから、石清水八幡宮の分霊でしょうか。町名は新しいとは言え、その「宮」にはこれだけの長い歴史があるのです。（田口義之・リビング福山「町名を訪ねて」より）

△今津町

松永市街地の西に位置する今津町は、今日でこそ海から離れた内陸の町になってしまいましたが、本来はその名の通り「津」（港）として発展した町です。

かつての海岸線は、東南の柳津町から大きく北に入り込み、神村の山沿いから本郷川の河口を経て、今津町の北を限る丘陵の裾を洗っていました。

今津の歴史は古く、室町時代の文明十七年（一四八五）の記録には、既に「新庄の内今津」としてその名が見えます（熊野那智大社文書）。新庄とは、現在の本郷町を中心とした松永北部に存在した中世の荘園で、今津は「草戸千軒町」と同じように、荘園の年貢積み出し港として発展した港町であったと思われる。

しかし、町の東を流れる本郷川の吐き出す土砂は、この町の港としての役割を比較的早く終わらせたようです。近世に入ると、今津は港町としてではなく西国街道（山陽道）の宿場町として知られるようになります。

この町が公式に「宿駅」に指定されたのは慶長七年（一六〇二）と伝わっていますが、宿場として史料に現れるのは、それより早く、天正初年に逆上ります。同三年（一五七五）、織田信長に謁見するため鹿兒島より上洛した

島津家久は、四月一日、「今津の町四郎左衛門といへる者」の所に一泊、翌日朝に向けて出発しているのです（中書家久上京日記）。

もともと神辺平野の北側を通過して府中に抜けていた山陽道が、この頃になって神辺から南下し、今津から尾道に通じるようになったのには、当時の内海水運の発達が大きく関係しています。すなわち、内海の要港鞆・尾道の発展は、街道をも沿岸部に引き寄せることになり、その中継地として今津の繁栄を見ることになったのです。

なお、今津の「今」は、今町・今市の「今」と同じく“新しい”を意味する言葉です。では『古津』はどこにあったのか、今後の課題のひとつです。（田口 義之・リビング福山「町名を訪ねて」より）

松永湾の史跡巡り

—— 旧山陽道を中心に ——

松本古墳

松永湾地域に数基有る大型古墳の一つで、全長約五十メートルで北面が帆立貝型をした帆立貝式古墳と言われています。墳頂部には竪穴式石室が有り石室からは、鉄剣、刀片、銅鏡が出土し墳丘面からは、埴輪片、葺き石が出土したと言われています。墳丘裾面と思われる所には、現在でも葺き石又は、積み石と思われる物が残っています。

古墳時代中期（五世紀代）の築造と言われています。当時の海岸線部に近く海洋豪族、海部（あまべ）の首長墓とも言われていますが、神村須恵地区を中心として多く散見する古代窯跡を当時支配していたと思われる豪族の首長墓説も捨てがたいと思われ、又は海部、須恵部両方を勢力沿としていた首（おさ）で有った可もありません。

神村八幡神社

祭神

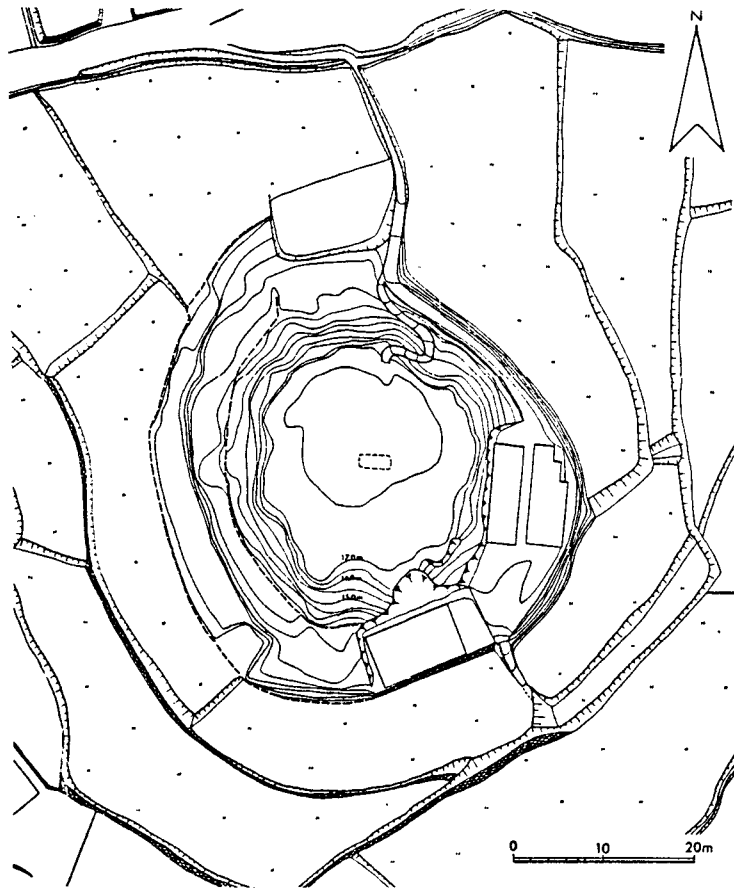
本殿

向かって右、菅田別尊（応神天皇）左、姫大神

神椽は烏帽子姿で笏を持ち左右に一对の金幣を備え高さは六十cm、横幅三十cmだそうです。

三間社入母屋造、向拝、千鳥破風付、銅板葺（六坪）

現在の神殿は昭和三十年代前半に再建されもとは、現在の拝殿が建っている位置に本殿が建てられていたとの事です。



付屬社殿

幣殿（三坪）、拝殿（十坪）、神輿舎（八坪）、手水舎（二坪）、社務所（二十五坪）、參集殿（四十八坪）鳥居二基

摂末社

稻荷神社、熊野神社、良神社、八重垣神社、天神社、石鎚神社、金山神社

由緒

延久元年（一〇六九）に山城国（京都府）男山八幡宮（石清水八幡宮）より御分靈を奉祀したのが始めと伝う、中世には本郷大場山城主古志氏の崇敬を受け、又福山藩主阿部氏歴代の藩主にも庇護され歴代の藩主が奉納した絵馬が拾数年前述は、二十数枚伝えられていたようです。

神事としては、五穀豊饒、害虫退散を願ひ六月末に虫送祭が行われ、九月第三日曜日（旧例祭日旧曆八月十五日）の例大際前夜には火踊おどりが奉納されていたとの事です。本郷八幡社にも同じく火踊おどりが伝わりと聞きます。

注……

矢捨古墳

神村町松本地区に在り、古墳時代後期（六世紀〜七世紀前半）の片袖式で横穴式石室を有する、円墳と思われます。

現況は民有地にて墳丘、石室とも破壊され石室後部天井石は、紛失して後部上方は開口破壊され、前部部天井石も一部紛失して開口破壊されている。

石室上部墳丘にわずかに盛土の残滓が有り五輪塔の残がい等の墓石が多数集積して有石室規模は、内部の高さ約二・五メートル、横幅石室中央低部で約一・九メートル、上部は両方より傾斜し天井部約一・二メートル、奥行は約五・六メートル、南面開口部向かって左に約三十センチ袖が有り、石室中心軸が正確に南北に通っている。

天井石は、現在四枚で有るが本来は六枚で有ったと思われます。



新熊野山東方院薬師寺



真言宗仁和寺派に属す古刹で、寺伝に由ると弘法大師が渡唐の際に、船を今津の浦に留め紀州熊野三社勧請して、新熊野山と命名し、東方院薬師寺、南方院金剛寺、西方院蓮華寺の三寺を、建立したのが始まりと伝えられている。現在は東方院薬師寺、西方院蓮華寺の二か寺のみが現存し南方院金剛寺は、薬師寺に合併されたと伝う。

薬師寺は薬師如来を、本尊とし大師自刻とも云われているが定かではない、なお当地出身の平櫛田中の養家は、薬師寺の檀家にて、当寺に平櫛田中氏作の薬師如来が、昭和四十年田中氏により施入され現在本尊と同様に奉られています。

本堂は享保四年（一七一九）再建され東向きになっている。又鐘楼門は宝暦十二年（一七六二）建立と伝えられる。

本堂北側の不動堂は延享三年（一七四六）再建とされ三体の不動明王を奉ってあり、一体は古志清左衛門豊長の持仏と伝えられ古志氏の末裔枝広家より施入と伝わり又一体は、本莊重政公自刻と云われ潮崎神社に伝わっていた物を石井氏により施入と伝う。

旧山陽道の宿駅、今津宿

今津町の旧山陽道沿いで主として、本郷川以西で有った様です。

今津とは文字通り今の津で、新庄本郷から松永湾を通り瀬戸内海へ出る、出口の港として栄えたようです。

文明十七年（一四八五）の尾道権現堂檀那引注文（野野契契書）に新庄之内今津と有るのが始めて、備陽六郡志には、寛文の比まで此辺遠干瀉にて……と有り、また文祿元年（一五九二）の太閤秀吉が九州下向の時今津に立ち寄ったと云われています。この頃には、旧山陽道は神辺御領から備後国府の府中へではなく、神辺宿から郷分、山手、津の郷、赤坂、神村、今津、尾道の高須、尾道浄土寺の北側から尾道町中へとの路線に変わったと思われる。

今津宿として整備されたのは、福島正則が慶長七年（一六〇二）芸備ニカ国の領主と成って以後と云われます。

村高

寛文十一年（一六七二）

五百七十二石三斗九升

屋敷七十九軒

元禄十三年（一七〇〇）

九百三十四石

屋敷百三十一軒、内、今津町二十八軒

宝永八年（一七一七）

駅馬十五頭

文化六年（一八〇九）

戸数 三百一軒

幕末には、商家軒を連れ一筋町をなし、宿場問屋に宿駕籠五・六十挺、駅馬五頭、飲み屋があり、「二十五文のソワカ」と呼ぶ前垂れ女有りと伝わり、この頃より現在の町筋の景観が整ったものと思われます。

今津本陣河本家



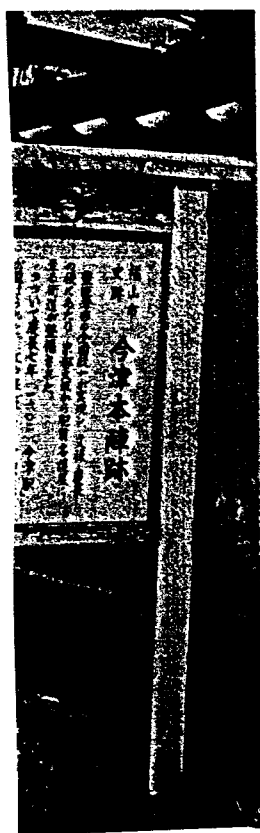
河本家は、代々今津の庄屋職を務め、剣大明神（現高諸神社）の祠官も勤めたと云われています。

また庄司田盛の末裔とも伝う旧家です。

本陣の建物は、明治初年の百姓一揆で焼き討ちに逢いほとんどの建物が焼失し僅かに、表門、塀の一部と広い石垣積みの屋敷地、が往時の面影をとどめている。

なお同家には駅馬割出帖、人夫くり出し帖、大名の食事控えなどの江戸時代の文書が伝わると云われています。

注：明治初年の百姓一揆については、森本繁著「福山藩幕末維新史」に詳しく記述されている。



西方院新熊野山蓮華寺

蓮華寺は新熊野山三か寺の一つで、薬師寺と同じく弘法大師所縁の寺院で、眞言宗の古刹です。

本尊は阿弥陀如来仏にて上品上生と云われています。

庄屋職河本家の檀那寺で脇本陣の役目も務めていたと云われます。また江戸時代剣大明神の別当寺で有った要です。

上段の間付きの書院が有り、縁側から眺める庭が美しいと言われます。

近年までこの寺院は、近辺の俳人達のサロン的な寺で有った様です。

境内には、先住石井瓢水師の「あの外は花月雪を遊びどこ」や矢野梅哉師の「老僧になぐさめられし墓参かな」等の句碑が立ち並んで居るとの事です。

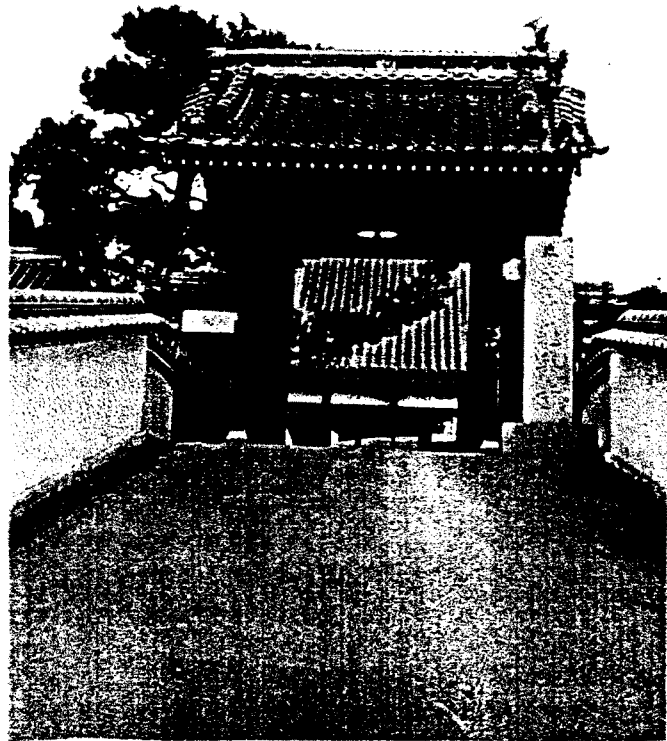
また剣神社の棟札が、数枚伝わっているとの事です。

高諸神社

高諸神社は、平安時代の「延喜式神名帖」に見える古社で、式内社です。

元は尾道の高須、今宮と言う所に所在したと伝えられています。

明治五年郷社に昇格し、剣大明神と合祀され現在地に高諸神社として祭られ今に至ります。



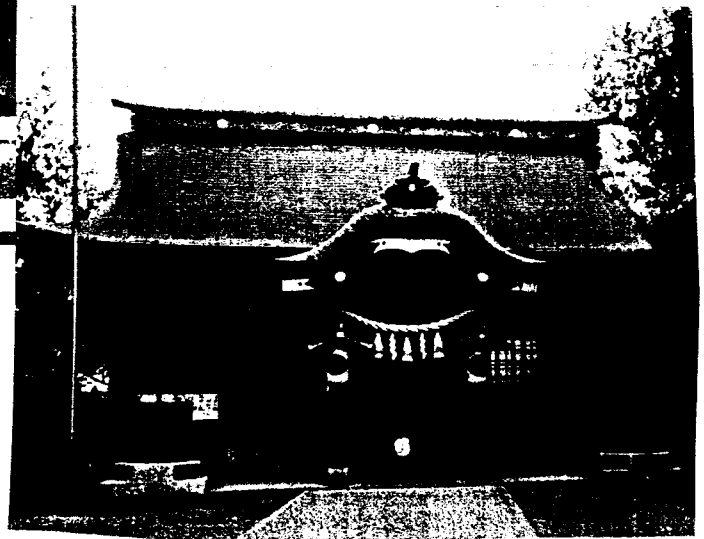
劍神社も式外社と伝う、古社といわれ古代この地に新羅の王子が漂着し王子の宝剣を御神体として祭ったのが始まりと云う。現境内の社殿が建っている社殿地は、大きな岩石が無数折り重なり丘を成しており古代磐境信仰の名残りでは、とも思われる。神社の神体は、剣状の岩を神体とし依代としてしていると云われる。この神社の祭礼時には：お剣さんの磯間の市：として多くの人々に親しまれている。

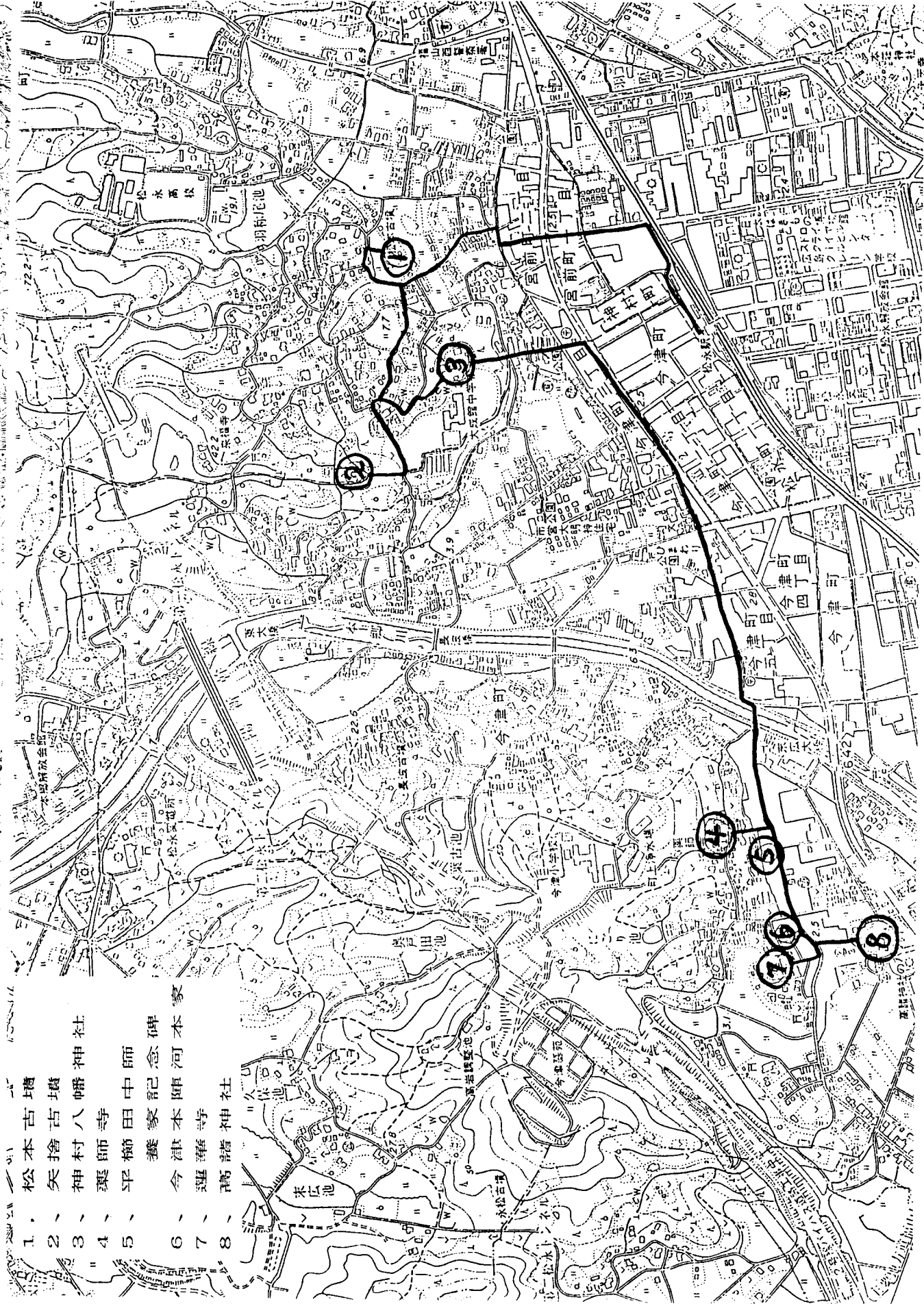
境内には往時の船溜りも面影を留めています。また境内裏側には市の天然記念物に指定されている、樹齢数百年になると思われる「ハク」の大木があります。同じくこの地方には少ない出雲式の狛犬も有り珍しいのではと思います。

共同井戸

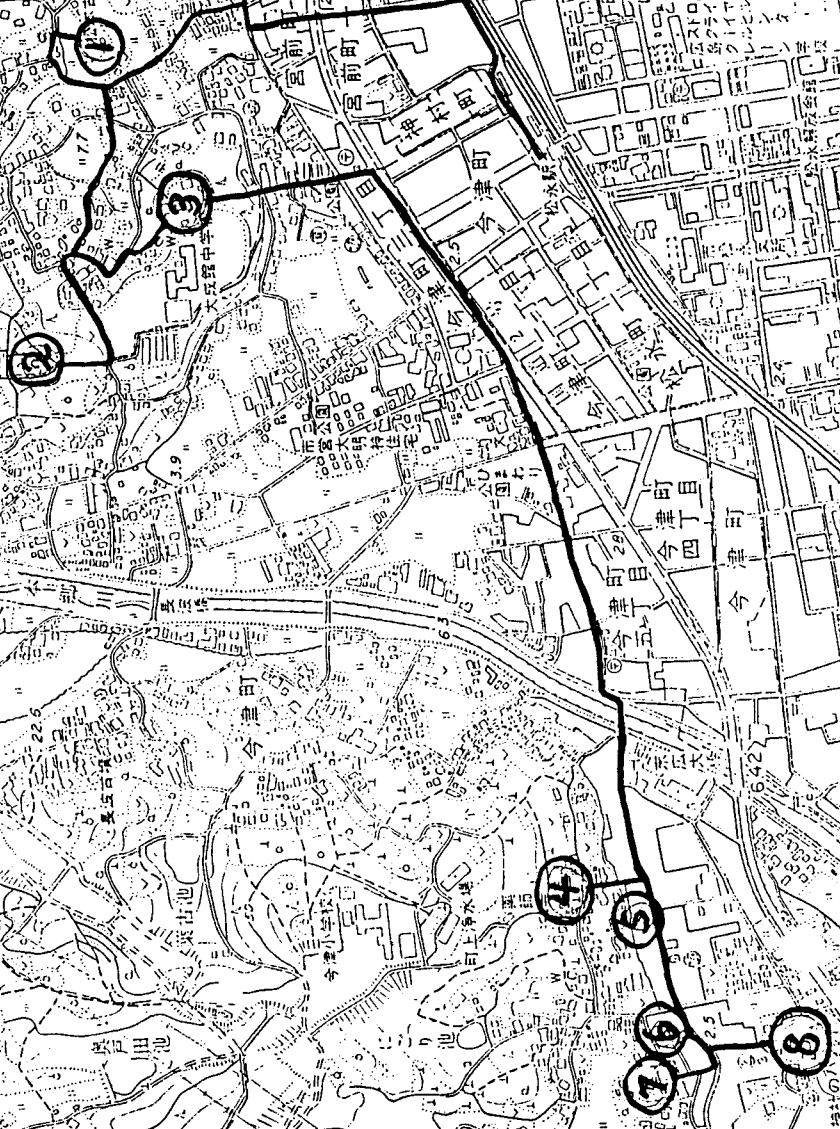
松永、神村、今津地区には、近年まで共同井戸が各所に存在していたが、最近では水道の普及により使用されなくなり、共同井戸そのものが消滅しつつ有ります。井戸によっては、近年まで地域の生活用水元として使用されてきました。中でも松永上ノ町の共同井戸は、現在でも夏場の散水用水、防火用水として地区町内の共有物として、清掃、整備されて大事に守られています。

井戸の形態は、石積み作りで上部は珍しい一六角形の石組み一の井戸枠で出来ており市指定の文化財に指定されております。また松永地区の井戸は、大部分が強弱の違いは、有っても塩水のようなです。

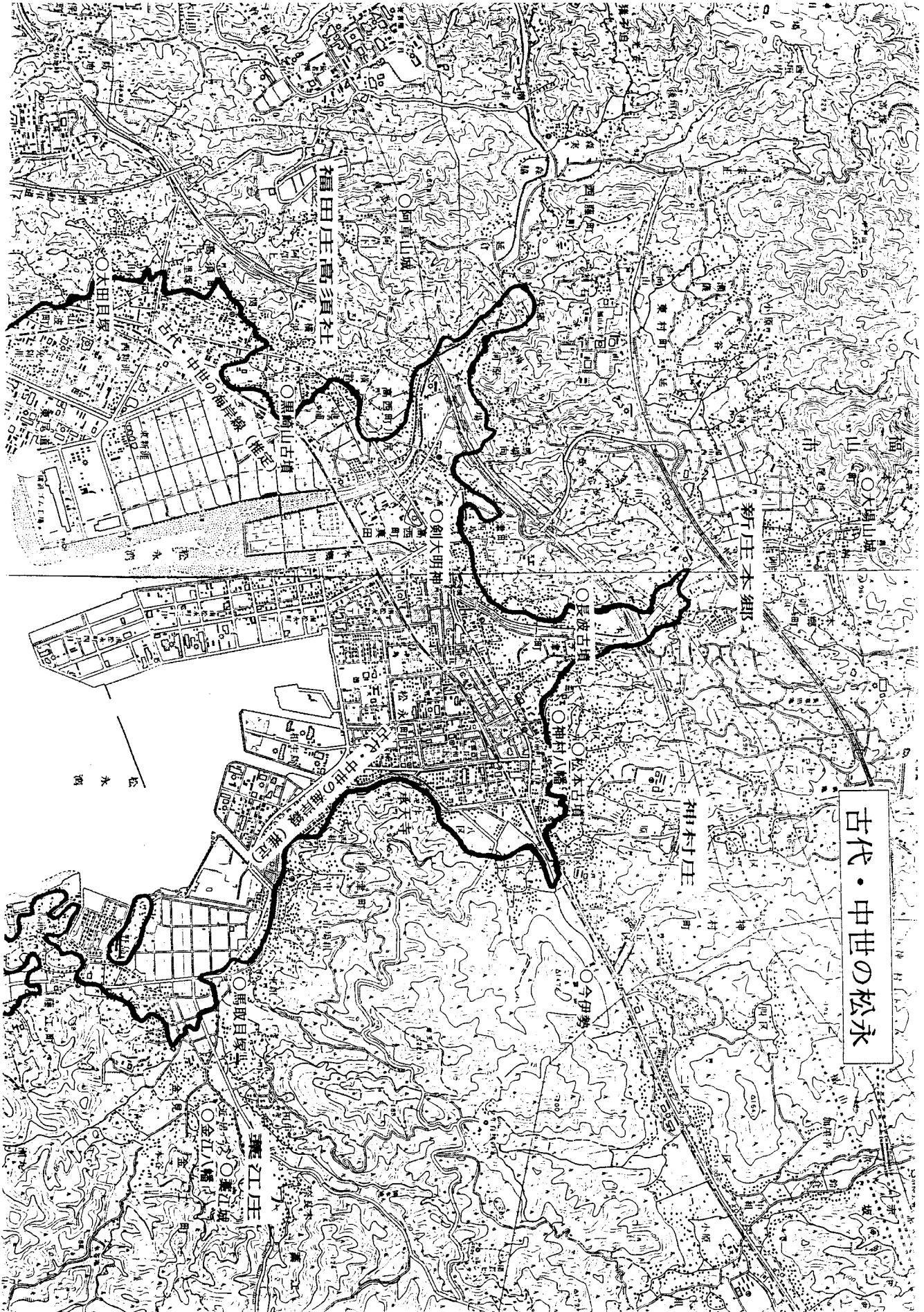




- 1. 松本古墳
- 2. 矢捨古墳
- 3. 神村八幡神社
- 4. 栗師寺
- 5. 平楯田中師養家記念碑
- 6. 今津本陣河本家
- 7. 蓮華寺
- 8. 高嶺神社



古代・中世の松永



福田庄高須社

新庄本郷

和村庄

松永江庄

○剣大明神

○長波古墳

○和村八幡宮

○松本古墳

○今伊勢

○馬取自家北

○金山八幡

○阿寺山城

○黒崎山古墳

松永酒